

【只見町】

2019 年度 ユネスコエコパーク関連事業

「只見町公認自然ガイドフォローアップ研修@茨城」を実施しました！

只見町は、豪雪に育まれた自然と生活・文化を守り、活かすという只見ユネスコエコパークの理念・目的を実現する一環として只見ユネスコエコパーク内のエコツーリズム・グリーンツーリズムを推進し、そのために只見地域の自然環境や野生生物、生活文化を案内、解説する只見町公認自然ガイド(以下、ガイド)の育成に努めてきました。認定後もガイドを対象にフォローアップ研修を行っており、今年度は、太平洋側のブナ林について理解を深めるため、茨城県の筑波山周辺で研修を行いました。只見町の代表的な自然植生は日本海側(多雪地帯)ブナ林で、これら解説するうえでも対極の太平洋側(少雪地帯)ブナ林を理解する必要があることから実施されました。研修は、9月7-8日(泊2日)の日程で行われ、8名のガイドが参加しました。現地案内人として、鈴木和次郎氏(只見ユネスコエコパーク支援委員会委員)、須崎智応氏(関東森林管理局森林技術センター)、池田伸氏(元関東森林管理局森林技術センター)にお願いしました。

2日間を通して、北関東における太平洋側ブナ林についての理解を深めることができた有意義な研修となりました。以下、研修内容の概要を紹介します。

【研修概要】

かつては北関東の山地帯にはブナ林が広がっていたとみられるが、奈良時代以降には人間活動、すなわち、牧野管理(火入れなど)により縮小したと考えられています。そうした経過の中で、現在、北関東の山地の山頂部にはブナが点々と残存しており、基本的には標高400m以上にブナが生育しています。その中で、今回は茨城県南部のブナが生育する筑波山、吾国山、御前山において研修を行いました。

9月7日(土)

■筑波山

筑波山は、日本の関東地方東部、茨城県つくば市北端に位置し、八溝山地の最南端に位置しています。山腹には筑波山神社の拝殿があり、御神体は筑波山そのものです。豪雪地帯の只見地域と違い、山頂部でも積雪は多いときで30cm程度です。筑波山において、ブナ林は、主に南側斜面に分布し、それらのほとんどが筑波山神社の社有林であり、それゆえブナを含む自然林が残されてきたようです。男体山(標高817m)南側斜面では、林冠を構成する樹木としてブナのほか、アカガシ(常緑広葉樹)、イロハモミジ、オオモミジ、コハウチワカエデ、ウリハダカエデ、イタヤカデ、ホオノキなどが確認できました。只見のような日本海側のブナ林は、林冠層の90%以上がブナで構成されていることとは異なり、ブナの優占度がかなり低く、多様な樹種と共存していました。また、ブナそのものの特徴についても葉は日本海側に比べて小型で厚く、山頂部で風当たりが強いためかブナの幹曲がりも大きく樹高も十数メートル、積雪がほとんどないためにブナの樹皮にはコケが張り付き、只見のブナとは大きく異なることが確認できました。実際、只見のブナを見慣れた参加者にはブナを判別するのが難しい様子でした。



筑波山山頂駅付近にて



男体山(標高 871m)南斜面付近のブナ-アカガシ林



只見(日本海側)ブナに比べ葉は小さく、厚い



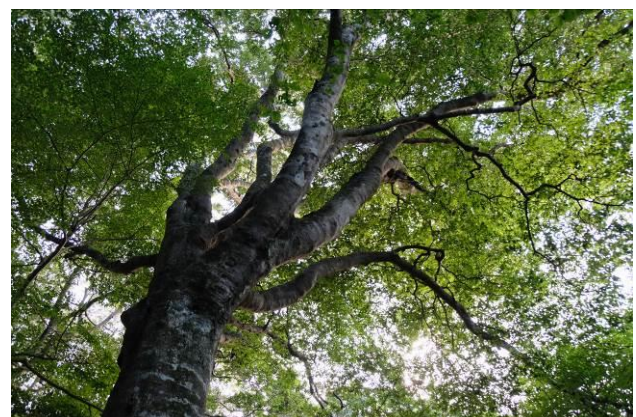
ブナの樹高は 10 数メートル(男体山付近)

■吾国山

吾国山(標高 518m)の山頂付近の北側斜面には、ブナ、イヌシデ、コナラなどから構成される落葉広葉樹林が成立していました。風当たりが弱いため、ここではブナの幹は通直で、胸高直径が 1m 近い大径木が存在していました。林床は、カタクリ群生地として刈り払い、管理されているが、本来であれば、太平洋側ブナ林の林床にでくるミヤコザサが生育しています。



ブナの巨木(吾国山山頂直下付近)



太平洋側にもブナの巨木はある！



ブナの老齢化が進み、ブナ林の衰退が心配されている(吾国山山頂付近)



ブナ林の中にカタクリ群生地

■セミナー

加波山山麓部にある桜川市真壁の宿泊施設において夕食後、セミナーが開かれました。

- ・須崎氏より御前山ケヤキ人工林での植生(春植物)回復試験について
- ・鈴木氏より本日のおさらい(太平洋側ブナ林)について

を発表をいただきました。発表後は、質疑応答。積極的な質疑が続き、予定時間を超えて、理解を深めました。



9月8日(日)

■御前山

(ケヤキ人工林、標高 50m)

前日のセミナーで須崎氏に紹介いただいたケヤキ人工林を見学しました。ケヤキは明治17年に河川の氾濫原に植栽されたもので(現在135年生)、詳しい保育履歴は不明とのことです。国有林内にあり、関東森林管理局森林技術・支援センターが1999年より溪畔域の植生(春植物)回復試験を行っています。林床に繁茂したアズマネザサの刈り払いを行うとともに、カタクリ、キクザキイチリンソウ、アズマイチゲ、イチリンソウ、キバナノアマナなどの春植物の個体数の変化などの調査が継続されています。



ケヤキ人工林(明治17年植栽)



解説看板

(御前山、標高 156m)

北関東でのブナの通常分布域(標高 400m以上)とは異なり、200m程度の低標高に分布するブナについて見学しました。ウラジロガシ、シラカシ、アラカシなどの常緑広葉樹が優占する暖温帯林のなかで、ブナやコナラ、サクラ類の落葉広葉樹が混じっています。かつては(50~60 年前)、アカマツ林であったが、松枯れにより現在のような林相になったとのことです。北関東における低地ブナ(林)の存在については、気候的な要因と地史的要因が指摘されていますが、貴重な財産であることは間違いのないものと思われました。また、大変洋側ブナ林を構成するイヌブナも沢沿いの崖錐に見ることが出来ました。



常緑広葉樹林



説明を受ける



御前山山頂付近(標高 156m)、突如ブナが現れる



イヌブナ(萌芽幹による株を形成)



ブナの巨木の前で集合写真(御前山)

【担当】

只見町役場地域創生課ユネスコエコパーク推進係

TEL 0241-82-5220